

# 国立公園「雲仙」と島原半島世界ジオパーク ～雲仙岳の秘めたるパワー～



環境省九州地方環境事務所



# 目次

・ 国立公園とジオパーク	P. 4	・ 雲仙岳と歴史・伝承①②③④	P. 22
・ 雲仙岳の活動と島原半島	P. 5	・ 雲仙岳と教育	P. 26
・ 雲仙岳の噴火と災害①②	P. 6	・ 雲仙岳と文化財	P. 27
・ 雲仙岳の恵み～生態系サービス～	P. 8	・ 雲仙岳と阿蘇山①②	P. 28
・ 雲仙岳の水陸の景観美	P. 9	・ 雲仙岳と天草諸島	P. 30
・ 雲仙岳の四季彩	P. 10	・ 雲仙岳を楽しむ	P. 31
・ 雲仙岳360度①②③	P. 11	・ 参考：80年前の地元新聞記事①②	P. 32
・ 雲仙岳の山々の顔ぶれ①②	P. 14	・ 参考：雲仙岳の80年前と現在	P. 34
・ 雲仙岳と水①②	P. 16	・ 参考：島原半島周遊の情報拠点	P. 35
・ 雲仙岳と生物多様性①②	P. 18	・ 掲載イラスト・写真の提供元①②	P. 36
・ 雲仙岳と食①②	P. 20		



# 国立公園とジオパーク

## ●雲仙岳を共通シンボルとする2つの自然公園

雲仙天草国立公園の雲仙地域（国立公園「雲仙」）は、雲仙岳を中心として、島原半島3市の標高の高いエリア全体が指定されています。昭和9年の3月16日に日本初の国立公園に指定され、2014年で80周年を迎えています。指定の際に特に評価された点は、三方の海と雲仙岳が織り成す“水陸の大展望”です。

その国立公園を核として、平成20年には島原半島全体が日本ジオパークに認定されました。平成21年8月22日には日本初の世界ジオパークに認定され、2014年で5周年を迎えました。英名は *Unzen Volcanic Area Geopark* で、テーマは「活火山と人の共生」です。

国立公園は「自然公園法」に基づいて指定され、区域内の雲仙岳本体の保護と利用について計画的に推進できる制度です。その説明からは一見、公園の区域外には関係のない制度のように思われがちですが、島原城下町、原城跡、小浜温泉街等の山麓の観光スポットにおいて、観光客の方々が楽しんでいる山～里(町)～海の風景の山(雲仙岳)の部分は、実は国立公園の制度で美しい状態に保全されているのです。

そして、その山～里～海の風景に隠された大地のストーリーを楽しく伝える“ふるさと紹介”の制度がジオパークと言えるでしょう。

本誌では、国立公園とジオパークの共通シンボル「雲仙岳」の様々な側面に光を当てることにより、国立公園とジオパークの魅力を一体的に紹介してみたいと思います。

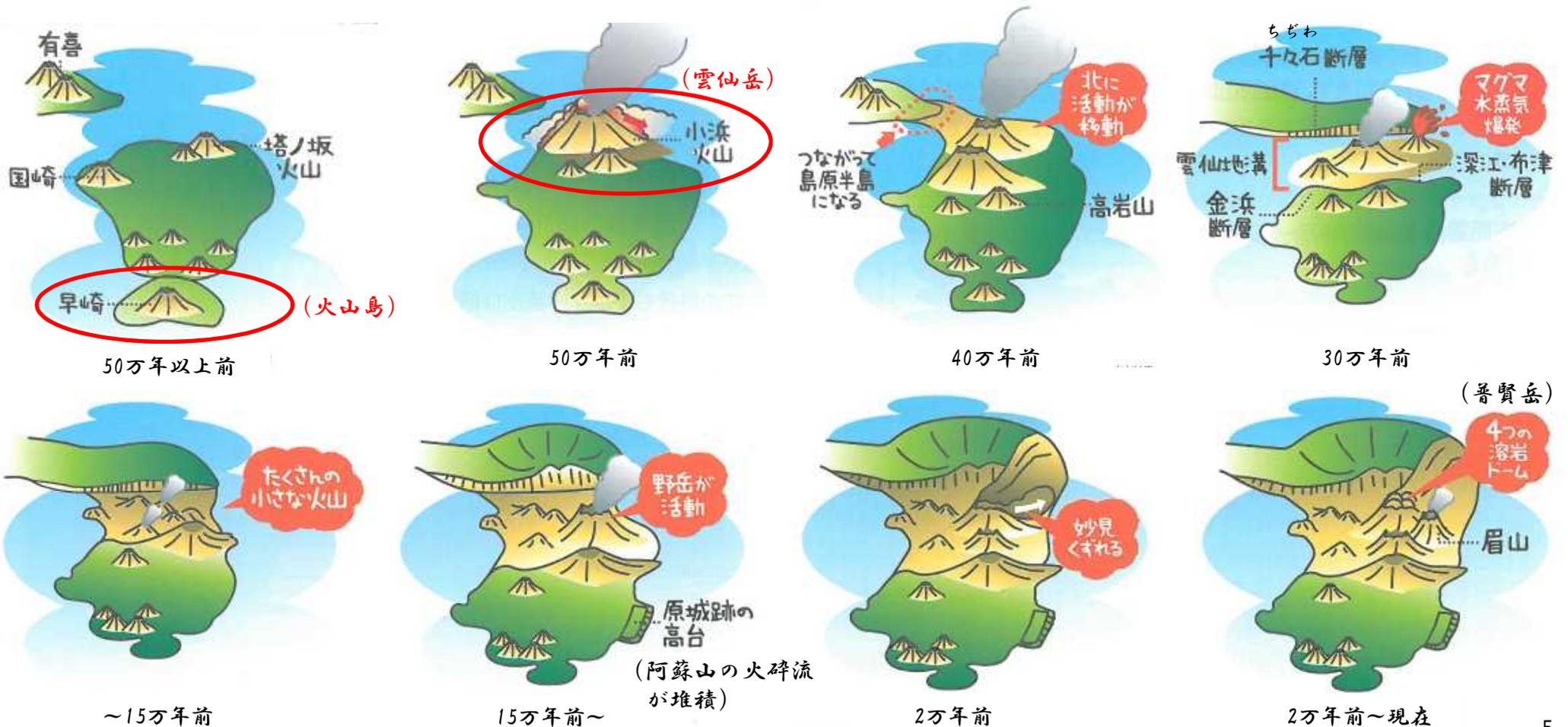


島原港のバックにそびえる  
国立公園の東端の“眉山”

# 雲仙岳の活動と島原半島

## ● もともと火山島だった島原半島

島原半島は、南端の口之津・早崎にあった小さな火山島の噴火から始まりました。やがて、噴火の中心が北方の雲仙岳 (総称)に移り、約40万年前には九州本土とつながって“島原半島”になりました。その後、半島を南北3地域に分ける断層の形成を経て、現在に至るまで活発な噴火活動を繰り返し、立派な雲仙岳・島原半島が出来上がっています。



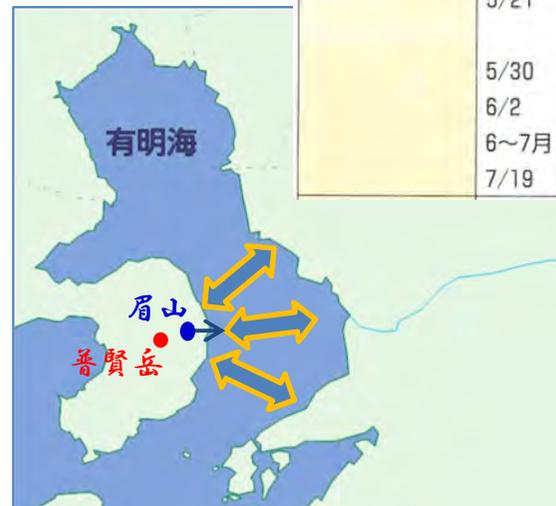
# 雲仙岳の噴火と災害①

## ●江戸時代の雲仙岳の噴火と災害

雲仙岳は、有史以降も活発に活動を続け、少なくとも3回は噴火したとされています。それに伴って、災害が発生しました（右表を参照）。特に、江戸時代の寛政の噴火では、普賢岳の噴火活動に伴う地震によって「眉山の大崩壊」が発生し、眉山の東側山体の土石が島原の町を埋めるとともに大津波を起こし、対岸の熊本と島原半島東側に繰り返し押し寄せて、甚大な被害を発生させました。この事件は、「島原大変、肥後迷惑」と呼ばれています。その一方で、噴火後には豊富な湧水が湧き出し、沿岸には良好な漁場や港湾、そして九十九（つくも）島の景観が生まれました。



寛政の噴火の際に大崩壊した眉山と崩落土砂で形成された九十九島



眉山の崩壊に伴って有明海を往復した津波

## ■雲仙岳の周辺で生じた噴火や主な地震活動

西暦 (和暦)	時期	事象
寛文の噴火 1663【寛文3年】	3月	普賢岳九十九島池より噴火
	12月	噴火が再開。普賢岳山頂から東北東へ約900m離れた飯洞岩峰より幅約100m、長さ約1kmの古焼溶岩が流出。
1664【寛文4年】		九十九島池が決壊し水無川に沿って土石流が発生。死者30余人
寛政の噴火 1791【寛政3年】 1792【寛政4年】	11/3	雲仙岳西側山麓で地震頻発
	2/11	普賢岳地獄跡火口より噴煙
	2/27	普賢岳穴迫谷琵琶の首より噴煙と土砂を噴出
	2/29	琵琶の首より新焼溶岩の流出始まる。
	3/21	穴迫谷蜂の窪からも溶岩噴出。琵琶の首からのものと合流し千本木に達する。
	4/21	三月朔の地震起こる。島原で震度5～6。新焼溶岩の流下ほぼ停止。
	4/23	震度4～5の地震2回発生。
	4/29	眉山東側山腹の楠平(楠木山)が幅300m以上にわたり約300mすべり落ちる。
	5/21	午後8時頃、震度6程度の地震(四月朔の地震)により眉山(天狗山)が大崩壊。津波が3回押し寄せ、第2波が最大で波高10m以上。死者約1万5000人
	5/30	上ノ原地区(眉山東山麓)の井戸より地下水が自噴。白土湖が誕生。
6/2	島原城下の新山、万町一帯からも湧水。	
6～7月	断続的に噴火。地震活動は、その後消長を繰り返す。1798(寛政10)年11月	
7/19	13日の噴火後、終息に向かう。	

# 雲仙岳の噴火と災害②

## ● 明治時代以降の雲仙岳の噴火と災害

明治時代以降は、大正11年と昭和40年代に群発地震がありました。本格的な噴火は、記憶に新しい「普賢岳の平成噴火」です。溶岩ドームから流下する火砕流と、噴出物が雨で流される土石流によって、島原・深江地域に大きな被害が発生しました。この噴火の過程で溶岩ドームが普賢岳(1359m)の高さを越えて成長し、平成新山(1483m)と名付けられました。

国立公園の中心部で噴火が発生し、火砕流や土石流が国立公園内から市街地に向かって流下して災害を引き起こし、新しい最高峰が出現したという一連の出来事は、国立公園「雲仙」80年の歴史のなかで最大の事件であったと言えます。この災害からの復興の一環として、「活火山と人の共生」をテーマとした「島原半島世界ジオパーク」(平成21年認定)が誕生しました。

## ■ 雲仙岳の周辺で生じた噴火や主な地震活動

西暦(和暦)	時期	事象
島原地震 1922【大正11年】	12/8	島原半島を震源とする群発地震が発生。死者26名、重軽傷者39名。
1968~1974 【昭和43~49】年の群発地震 1968【昭和43年】		雲仙岳付近を震央とする有感地震が発生。地震活動は1970年に最も活発化。1974年普賢岳東ろくの小さな盆地でおきた火山ガスの異常噴出を以って活動は終息。
1990【平成2年】	11/17	普賢岳地獄跡、九十九島火口より噴火
1991【平成3年】	2/12	屏風岩火口より噴火
	5/20	溶岩ドーム出現を確認
	5/24	初めて火砕流の発生を確認
	6/3	火砕流が上木場地区まで到達。死者行方不明者43人
	6/8	火砕流が国道57号付近まで到達
	6/30	水無川で大規模土石流発生。有明海に到達
	9/15	火砕流が上木場地区、大野木場地区まで到達。大野木場小学校消失。
1992【平成4年】	8/8	火砕流が大野木場地区まで到達
1993【平成5年】	6/23	火砕流が千本木地区まで到達。死者1人。7月には火砕流が国道57号線をこえる。
1995【平成7年】	5/月上旬	噴火活動停止
1996【平成8年】	5/30	九州大学地震火山観測所、太田教授が「噴火は終息した」との見解を示す。



日中の火砕流の様子



夜間の火砕流の様子



普賢岳

平成噴火前



普賢岳  
平成新山

平成噴火後

# 雲仙岳の恵み～生態系サービス～

## ●雲仙岳の生態系サービス

私たちの暮らしは、食料や水の供給、気候の調整など、自然の生態系の恵みによって支えられています。これらの恵みは生態学で「生態系サービス」と呼ばれます。島原半島では、古来、雲仙岳から様々な生態系サービスを受けてきました。火山災害を乗り越えながら、人々がこの地に住み続けて来た理由は、まさにこの点にあると言えるでしょう。



### 【供給サービス】

美味しい空気（酸素）、美味しい水、温泉、美味しい農産物・水産物、良質な木材など

### 【調整サービス】

山麓の温暖な気候、中腹以上の冷涼な気候、森林による気温変化の緩和や洪水の抑制など

### 【文化的サービス】

美しい自然景観、宗教・伝説・文化（絵画、詩、小説等）・教育に関する素材の提供など

### 【基盤サービス】

上の3つのサービスの基盤となっている、生態系のもともとの作用（火山噴火による大地の形成、植物による光合成、生物間の食物連鎖、水の蒸発による雲の形成・降雨、河川による水・土砂・養分の運搬など、物質を生産し、移動させ、循環させる作用）

# 雲仙岳の水陸の景観美

## ●水陸の大展望

国立公園「雲仙」の特色で、80年前の主な指定理由は“[水陸の大展望](#)”です。三方を海に囲まれた雲仙岳は、山と海がセットで眺められる景観が楽しめます。同じ火山の阿蘇山・くじゅう連山や霧島山とは異なる点です。

山から眺める海



海から眺める山



# 雲仙岳の四季彩

## ●四季の妙

雲仙岳の自然は季節を巡って変化し、四季折々に異なる色彩の表情を見せてくれます。



仁田峠・妙見岳のミヤマキリシマ

春

夏



吹越周辺のヤマボウシ

秋

冬



普賢岳紅葉樹林 (妙見岳)



普賢岳の霧氷 (花ぼうろ)

# 雲仙岳360度① ～山麓から～

## ●山麓から眺める表情

雲仙岳は360度に異なる表情を見せ、山麓の各地域ならでは風景が地域の方々に親しまれています。

①吾妻

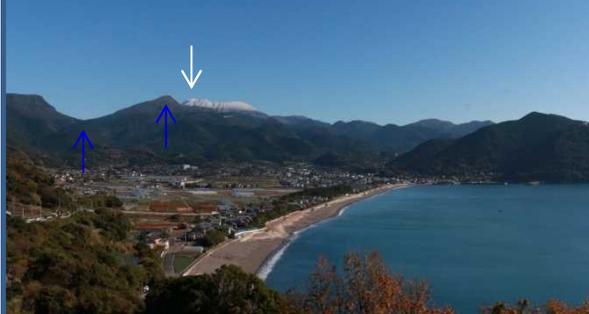


②国見



雲仙岳には、現在名前が知られているものだけでも30以上の山々があり、山麓各地域から見える山の組み合わせは異なります。写真中の白↓は平成新山の位置を表し、山並みの形の変化が見て取れると思います。  
地域ごとに形・大きさが目立つ山があり、吾妻では吾妻岳、千々石では九千部岳（+千々石断層）、有家では高岩山、鳥原では眉山が目立ちます（青↑で表示）。

⑦千々石



③鳥原



⑥南串山



⑤口之津・加津佐沖



④有家



# 雲仙岳360度② ～海を越えて～

## ●有明海・橘湾の海越しに眺める表情

雲仙岳は360度に異なる表情を見せ、かつての漁師は山の形を見て自分の船の方角を把握していたと言われます。

①白木峰高原



②東よか干潟 (佐賀県)



奈良時代に編纂された肥前国風土記には、かつて景行天皇が九州に行幸された際、対岸の長洲の浜(③のやや南)から雲仙岳方面を眺められ「あれは島か半島か」と気になって尋ねられる場面が登場します。有明海にぽっかり浮かぶ島のように見える島原半島の姿は、古代から人々の心を捉える景観だったのでしょう。この景観は、平成24年、荒尾市(③)の市民公募で「荒尾八景」の一景に選ばれています。

⑦江の浦



③荒尾干潟 (熊本県)



⑥天草松島 (熊本県)



⑤御輿来海岸 (熊本県)



④河内みかん山 (熊本県)



# 雲仙岳360度③ ～陸を越えて～

●海をまたいで陸越しに眺める表情

雲仙岳は360度に異なる表情を見せ、西九州の広範囲から眺められるランドマーク（目印の山）となっています。

⑩稲佐山



②諫早市街地



③竹崎城跡 (佐賀県)



④有明佐賀空港 (佐賀県)



①長崎空港



⑤大牟田延命公園 (福岡県)



⑨天草空港 (熊本県)



⑧長島行人岳 (鹿児島県)



⑦八代平野 (熊本県)



⑥阿蘇草千里 (熊本県)



# 雲仙岳の山々の顔ぶれ①

## ●個性あふれる30以上の山々

雲仙岳を構成する山々は、様々な形状や歴史をもち、東西南北、朝夕と異なる表情を見せてくれます。

<p>南側</p> <p>妙見岳 国見岳 普賢岳 平成新山</p> <p>カルデラ</p> <p>(縦山)</p>	<p>西側</p> <p>平成新山</p> <p>普賢岳</p>	<p>東側</p> <p>国見岳</p>	<p>南西側</p> <p>妙見岳</p>
<p>雲仙岳の主峰群である4兄弟 (妙見カルデラの中に普賢岳・平成新山が誕生)</p>	<p>普賢菩薩にまつわる山 (鳥原市／雲仙市の最高峰)</p>	<p>国見町の名の由来の山</p>	<p>妙見菩薩にまつわる山</p>
<p>雲仙岳の主な山々の位置</p>	<p>南東側</p> <p>くせんぶ 九千部岳 吾妻岳</p>	<p>北側</p> <p>野岳</p>	<p>西側</p> <p>高岩山</p>
<p>シャープな山容／緩やかな山容 (僧行基の修行の山／ 吾妻町の名の由来の山)</p>	<p>仁田峠背負う山 (南鳥原市の最高峰)</p>	<p>巨人“みそ五郎”の住まう山</p>	
		<p>東側</p> <p>絹笠山</p>	<p>西側</p> <p>矢岳</p> <p>(原生沼)</p>
		<p>雲仙地獄を西から見守る山</p>	<p>雲仙地獄を東から見守る山</p>

# 雲仙岳の山々の顔ぶれ②

● 様々な数字で表現されてきた起伏に富む山容

雲仙岳は、三岳、五岳、三岳五峰（三峰五岳）、八景、二十四峰、三十六峰と、様々な数字で表現されてきました。



東側

眉山

(天狗山、七面山)

鳥原の町を見守る緑の屏風  
(雲仙岳東端の溶岩ドーム)



北側

舞岳

(矢筈岳)

有明の町を見守るお椀状の山



南側

とりかぶと  
鳥甲山

田代原高原 (千々石断層) を  
見守るトサカ状の山



北側

さるば  
猿蓑山

小浜温泉・千々石の町を  
見守る傘状の山  
(雲仙岳西端の溶岩ドーム)

眉山は、奥山 (普賢岳等) に対する“前山”の発音が  
前山⇒マイ山⇒眉山に転じたものとされています。  
舞岳も前岳から同様に転じたものと推察されます。



西側

千々石  
断層  
吾妻岳 ↑ 九千部岳 平成新山  
鳥甲山

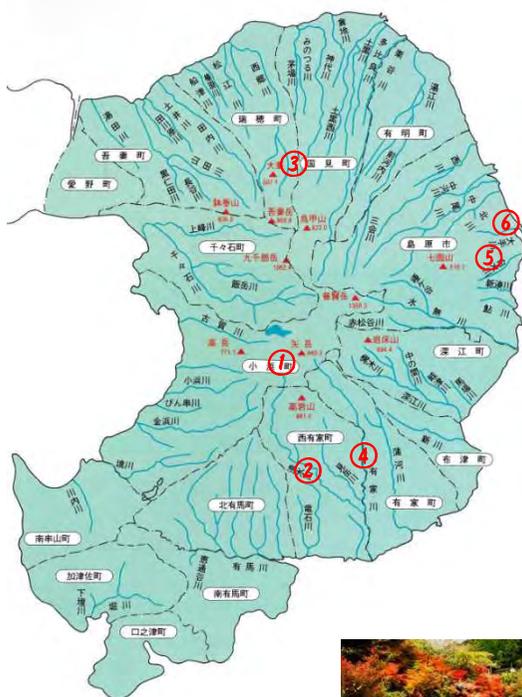


北西側

# 雲仙岳と水①

## ●豊かな水～河川・滝・湧水～

東シナ海から吹いて来る湿った西風は、雲仙岳に当たると大量の雲を発生させ、雨を降らせます。山の上部を通る仁田峠循環道がしばしば濃霧で通行止めになるのも同様の仕組みです。雲仙岳に降った多くの雨は、地下に浸透して地下水となり、一部は地表に湧き出して湧水となり、河川として流れ出します。このため、半島中央の雲仙岳からは、四方八方へ放射状に河川が流れ出しています。河川の流路上には、地質学的な要因で滝ができているところもあり、癒しスポットとなっています。また、山麓の島原や瑞穂、小浜では、地下深くから水が豊富に湧き出し、島原では名水百選にも選ばれた湧水群を形成しています。



島原半島の河川  
(一級河川8本  
二級河川29本)



千畳敷(鮎婦の滝上)



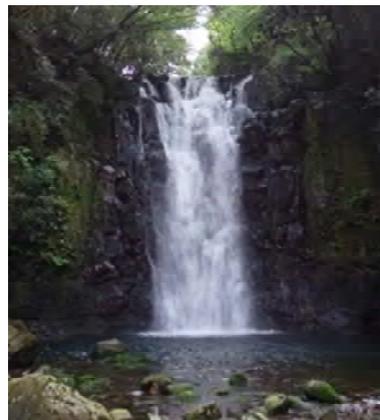
①一切経の滝



③岩戸湧水



⑤江戸時代の眉山崩壊後に湧き出した  
しらこ  
白土湖(昭和2年頃)



②戸ノ隅滝



④鮎婦の滝



⑥島原の湧水群

# 雲仙岳と水②

## ●多様な温泉～十湯十色～

島原半島には、雲仙岳の火山活動と関係のある火山性の3温泉（小浜・雲仙・島原）をはじめ、多様な泉質の温泉があります。火山性の3温泉は、西の橘湾の地下にあるとされるマグマだまりから上昇してくる高温の火山ガスが、地下深くあるいは地表付近で地下水と出会い、混ざり合ってきたものです。小浜温泉は塩化物泉（塩湯、アルカリ性）、雲仙温泉は硫黄泉（酸性）、島原温泉は重曹泉（中性）と炭酸泉（弱酸性）です。その他の温泉もそれぞれ独自の泉質で、潮騒の聞こえる温泉や海までつながっているように感じる温泉など、多様な魅力が楽しめます。

雲仙岳の旧名“温泉山/温泉岳”は、遠くからも視認できる中腹の雲仙地獄の温泉湧出に由来する山名です。地獄では雲仙岳の呼吸が観察できます。



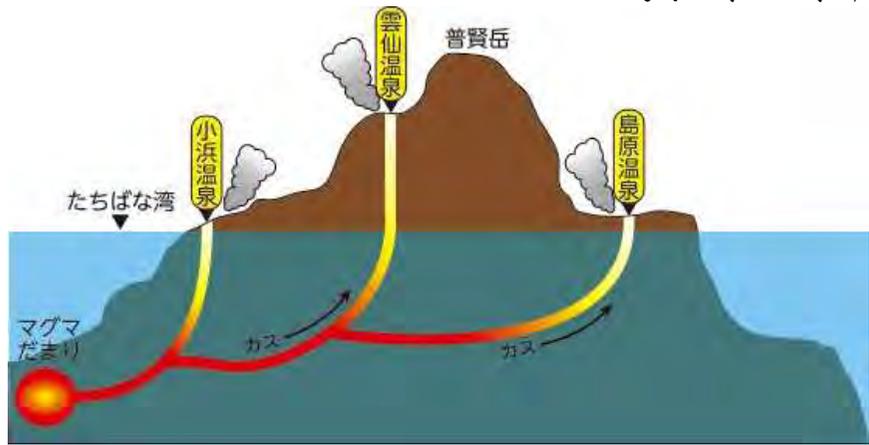
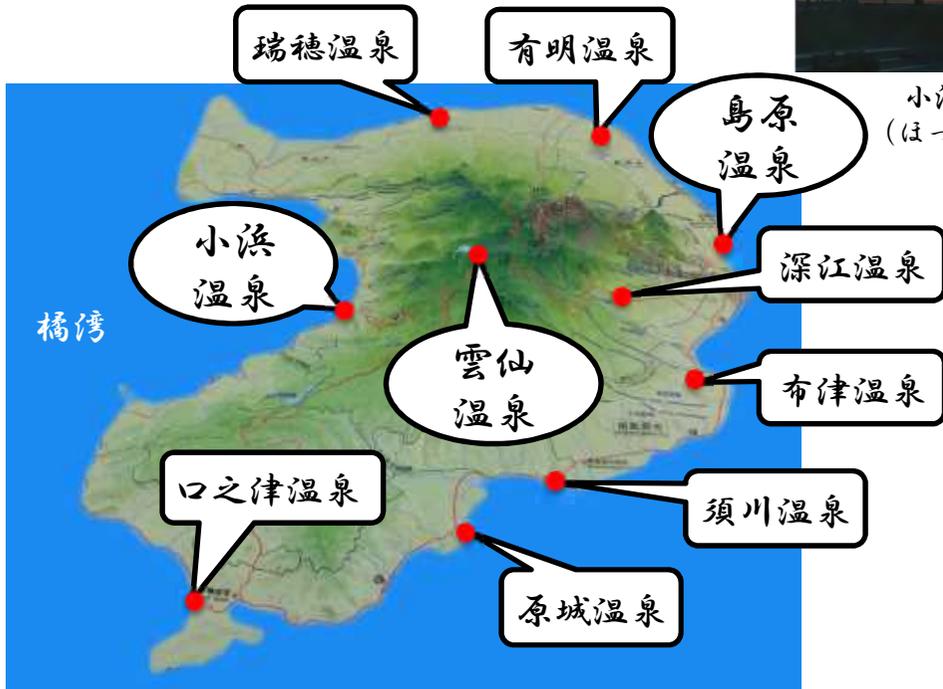
小浜温泉の足湯  
(ほっとふつと105)



雲仙温泉の湧く雲仙地獄  
(清七地獄)



島原温泉の飲泉所



# 雲仙岳と生物多様性①

## ●森林と草原～ミヤマキリシマ群落との意外な関係～

雲仙岳は、春はミヤマキリシマのピンク、夏はヤマボウシの白や緑、秋は紅葉の黄色や赤、冬は霧氷の白銀と、山々の樹木が衣替えしながら四季折々の色彩を見せてくれます（「雲仙岳の四季彩」ご参照）。その樹木のイメージもあるためか、“豊かな森林”のイメージが強いようですが、実はかつて、雲仙岳の山間部の平地や斜面には、広大な草原が広がっていました。温暖湿润な日本では、草原は放っておけば森林へと遷移してしまいましたが、阿蘇を代表とする日本各地の草原は、野焼きや放牧、草刈りといった農業の営みによって遷移が抑えられ、維持されてきました。ここ島原半島では、平安時代から牛の放牧記録があり、江戸時代には、農繁期に活躍する牛馬が夏の期間は山々へ放牧され、草をはむ、というシステムができあがっていました。牛馬が放牧され、樹木の生育が抑えられると、シバやススキの草原になりますが、葉に毒があって牛馬が好まないミヤマキリシマは、放牧草原の中で一大群落を形成します。現在、ミヤマキリシマ群落が見られる仁田峠や池の原は、かつての放牧地でした。



仁田峠・妙見岳のミヤマキリシマ群落



矢岳とミヤマキリシマ群落



池の原（空池原）の放牧馬

池の原のミヤマキリシマ群落（○内：国指定天然記念物）  
現ゴルフ場のエリアには、かつて馬が放牧されていた。  
写真奥の矢岳や手前の野岳の斜面にも放牧され、現在の群落を中心にミヤマキリシマの大群落が広がっていた。



明治～昭和初期には、絹笠山の周辺一帯で羊も放牧されていた。絹笠山麓（札の原）の放牧羊

# 雲仙岳と生物多様性②

## ●牛馬と草原とミヤマキリシマ群落

古くから農作業用の牛馬の放牧が盛んだった島原半島では、江戸時代には島原藩主が体質強健な地域ブランド“島原馬”の生産に力を入れたこともあり、雲仙岳の山間部には牛馬が草をはむ草原とミヤマキリシマの群落が一面に広がっていました。島原藩主が野焼き禁止令を出すようになって以降は、草原の維持が難しくなり、草原は減少していきましたが、雲仙岳が国立公園の指定候補に内定した昭和7年の時点でも半島全体で約2635haの放牧草原が残っており、ミヤマキリシマ（+ヤマツツジ）の群落も約880ha残っていました（飼育概数：馬8000頭・牛7000頭）。ところが、昭和9年の国立公園指定を前に多くの地域で放牧が停止され、指定直後から草原・ミヤマキリシマ群落のヤブ化が一気に進行し、昭和55年には約40ha（約5%）まで減少してしまいました。指定の当時、“観光と農業（畜産業）は両立しない”という考えがあったようですが、実は農業あつての観光だったのです。

現在、その当時の面影を残している場所が奥雲仙・田代原高原です。放牧牛と草原とミヤマキリシマ・ヤマツツジ群落のセットが見られます。JA島原雲仙が放牧する黒牛（肉用牛）による“草刈り”と奥雲仙の自然を守る会による保全活動で維持されています。仁田峠や池の原、宝原のミヤマキリシマ群落は、長崎県や雲仙を美しくする会の下草刈り等の保全活動で維持されています。



たしろばる  
田代原高原の放牧草原とミヤマキリシマ・ヤマツツジ群落  
江戸時代から終戦までは馬、戦後は牛を放牧。フン虫も生息。  
近年の放牧頭数減少に伴い群落も減少。現在、  
被圧木の除去により群落を再生中。

ほうばる  
宝原のミヤマキリシマ群落  
国立公園指定当時は250ha（現在の約100倍）  
あり、写真奥の高岩山の背中はピンク色に  
染められていた。

※ミヤマキリシマの保全活動に興味関心を持っていただける  
観光客や市民の方々のボランティア参加を歓迎しています。

# 雲仙岳と食①

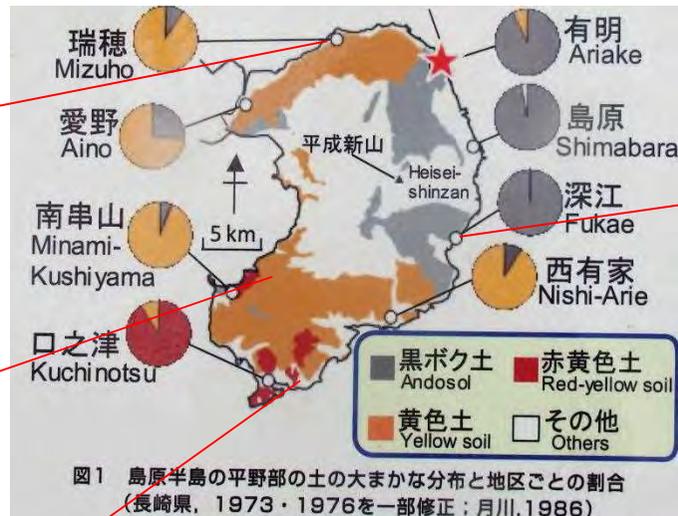
## ●土壌が産み出す大地の恵み

雲仙岳の重要な恵みとして、中腹から山麓で豊富な作物がとれることが挙げられ、島原半島内では大概の野菜が手に入りますし、お米も多く栽培されています。雲仙岳の土石流や火山灰に由来して、各地域に異なる土壌が形成されており、それらを使い分け、適した作物を配置することによって、長崎県の農業生産額の約4割を占める高い生産性を誇っています。



水田（瑞穂）

保水性の良い黄色土を活かし、  
棚田が作られている（小浜）



柔らかい黒ボク土を活かして根菜類  
(ニンジン)の棚畑を作っている（深江）



ジャガイモが好む酸性で鉄分の多い赤黄色土を活かし、生産量の多い  
島原半島内でも味に定評のあるジャガイモが生産されている（口之津）



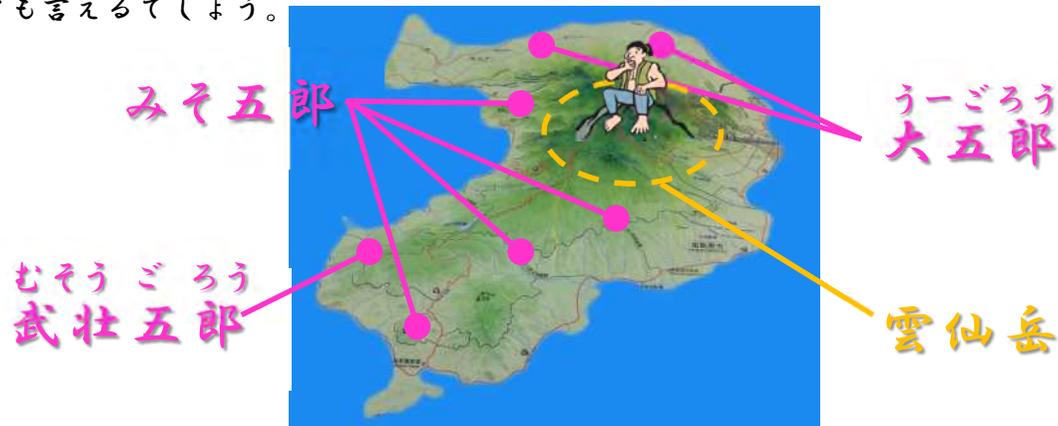
傾斜地での棚田や棚畑の作成技術も  
大地の地形を生かす知恵として貴重

# 雲仙岳と食②



## ●大地の恵みと巨人伝説

島原半島には、雲仙岳を囲むように各地域に巨人伝説が伝わっていますが、特に有名なのが“みそ五郎”です。みそ五郎は、語源の分析から実は雲仙岳の化身であると推察され、みそ五郎が味噌をもらいながらお百姓さんや漁師さんのお手伝いをする物語は、雲仙岳が海と一緒に作り出した“山・里・海の恵み”を語り継いでいるものと言えます。島原半島では、山・里・海の食材が多く揃い、具雑煮や島原素麺、小浜ちゃんぽんなどの郷土料理が楽しめます。国立公園・ジオパークは“みそ五郎の恵みの公園”とも言えるでしょう。



### ●“みそ五郎”の名前の由来●

みそごろう or むそうごろう + 御霊  
 かつてないほど or 並ぶ者がいないほどの力を持った靈魂



みそごろう or むそうごろう



### ジャガイモ

長崎県の全国第2位の生産量を支える島原半島のジャガイモは、半島内の飲食店でコロツケなどの形で味わえる。



### 島原素麺

全国第2位の生産量を誇る素麺は、雲仙岳から吹き下ろす風や湧水、有明海の塩に育まれた手延べ麺。



### 小浜ちゃんぽん

中国から長崎を経て小浜で独自の進化を遂げたちゃんぽんは、地元の食材を豊富に盛り込んだ栄養食。



### 具雑煮

島原・天草一揆の際、一揆軍が餅と海・山の具材を集めて煮込み、陣中で食べたのが起源とされる。



### 六兵衛

世界でも珍しいサツマイモの麺。江戸時代の飢饉の際、深江の庄屋の六兵衛さんが考案したとされる。

